芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」とその時代背景
——同時期の短編群を参照して

黄　暁波

一　はじめに

芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」が『中央公論』に掲載された大正九年、一月七日付の『読売新聞』の朝刊七面に、「新年の雑誌」というコラムがあった。そこには、無署名で、各雑誌の新年号の創作についての評論が載せられている。「鼠小僧次郎吉」に対しては、「構図が大へん面白い、そこに苦心があったのであろうが、それにしても其構図が、何かの都合でしつくりと作者の作意に嵌らないで了つたのではなからうか——と思われる調子外れがある」というような評価がされている。

ほかの同時代評と異なって、この評は、ただ評を下すだけでなく、作者の創作意図がどこにあるかという素朴な疑問を提示してもいる。この評は、「鼠小僧次郎吉」における作意論の先蹤であるといえる。

また、ほぼ同時期の『読売新聞』で、太田善男は、「英雄崇拝のパロディーとでも云ふべきものであらう。あの有名な愛蘭土の戯曲にもかう云ふ安価な浪漫主義が面白くて取り扱われてゐる（後略）」[1]との意見を述べている。

ここで言及されている「あの有名な愛蘭土の戯曲」とは、ジョン・ミリントン・シングの *The Playboy of the Western World*（日本語訳名としては『西国の伊達物』や『西方の人気者』があり、芥川の紹介文には「西方の遊児」とされている）という戯曲である。大正三年、『新思潮』第一巻第七号の巻頭で、「柳川隆之介」の署名で芥川は、「シング紹介」という論稿を発表した。この「シング紹介」は未完のままであり、小見出しに「青年」と一つだけあることから、シングの趣味をも含めた生い立ちを詳細に紹介する予定であったろうと推測される。実は、この戯曲は、シングの文学者としての生涯において深い意味をもっているといわれている。上演当時、風刺の斬新さのために、アイルランド西部にあるダブリン地区のナショナリストと中産カトリック階級の怒りを買い、暴動が起こった。この事件の背景と誘因について、詳しくシングを紹介するつもりであった芥川は、ある程度認識していたであろう。この戯曲では、「リアリズム様式とモダニズム様式の混在は、乖離しているというよりも、シングのヴィジョンのうちでは統一されて」おり、当時アイルランドが「イギリスに対する独立戦争前夜という時代背景があり、そのような状況のもとでは、イギリスの圧政のみならず、ナショナリズム運動の急進的イデオロギーに対する」[2]いかにもシングらしい現実的な風刺が見られているという。また、このシング戯曲が「鼠小僧次郎吉」に及ぼした影響について論及している奥野久美子は、「鼠小僧関係の講談、実録や歌舞伎にも、鼠小僧を騙って尊敬され、一転して嘘がばれて袋叩き、というストーリ

ーの展開は見られない」といい、「ストーリーの展開は同戯曲によるもの」[3]としている。

こうした事情に基づき、それまでの日本の伝統に見られない新鮮な素材が混じりこんでいることから、「構図がたいへん面白い」と評されたのだと思われる。しかし、シングの戯曲と比べれば、「鼠小僧次郎吉」は非常に単純化され、全体としては「構図」だけがシングの戯曲に拠ったものと見られる。奥野は、最後のオチの扱い方についてのみ、「次郎吉が自分の正体を明かすという設定自体が、講談における一種のパターンを踏襲したもの」としている。それゆえ、上述の太田の主張のように、「鼠小僧次郎吉」を考察する際、この作品が「英雄崇拝のパロディー」であると言っただけでは十分とは言えない。芥川がシングから、ストーリーの組み立てだけでなく、リアリスティックな要素も汲み取った可能性もある。本作品が「浪漫主義」であるか「写実主義」であるか、あるいは「現代主義」であるかという問題は、本作品がいかに「現実性」を反映しているかという観点からいえば、さほど重要ではない。本稿の主な目的は、本作品がどのような時代との葛藤を通して形成されたか、また、いかに作者の心象風景と関係していたかを探究することにある。「鼠小僧」に内面化された「像」を的確につかむために、「時代」とのつながりを示唆している言葉を検討することによって論を進めたい。

予め断っておくが、先行論では自称「親分」が本物の鼠小僧であるかどうかをめぐり、見解が肯定と懐疑に分かれている。『芥川龍之介全作品事典』(熊谷信子執筆の「鼠小僧次郎吉」項。勉誠出版、平成十二年)と『芥川龍之介事典』(田中実執筆の項。増訂版、明治書院、平成十三年)を代表とする大方の意見では、「親分」が正体を明かす最後の部分は、落語的なオチとして受け止められている。他方、石割透などは、オチのままの読みをするなら、正に「親分」こそが疑われるべきではないかとしている。いずれにせよ、主題に対する論議は、テクストの最後のオチから手をつけ始められてきたことが注目される。

二　古典に見られる明白な時代性と作品における曖昧な時間設定

先行における論述の手順を踏襲して、「親分」が本物の鼠小僧であると読むならば、テクストに不可解な箇所のあることが分かる。まず、第一節の以下の引用に注目してみよう。(原文引用は『芥川龍之介全集』岩波書店、一九九六年による)

> 「そいつがこの頃はご覧なせえ。けちな稼ぎをする奴は、箒で掃く程ゐやすけれど、あの位な大泥棒は、つひぞ聞か無えぢやごぜえませんか」
> 「聞か無えだって、好いぢや無えか。国に盗賊、家に鼠だ。大泥坊なんぞはゐなえ方が好い。」(二一四頁)

引用は、親分子分の対話である。傍線部は、全集の注解によると、『徒然草』九十七段に拠るとされる。その段には、「その物に付きて、その物を費やしそこなふ物、数を知らず

あり。身に虱あり、家に鼠あり、国に賊あり、小人に財(たから)あり、君子に仁義あり、僧に法あり」[4]とある。通釈は、「財は有用であり、仁義も法も道の根本義、それぞれ人の求めようとするものである。ところがそれぞれのプラスが、それに捉われることによって、すべてマイナスに逆転することを、虱や鼠を例に挙げながら示したもの（後略）。」[5]となる。さらにこの『徒然草』の典拠は、『荘子・駢拇(べんぼ)篇』の「彼其所殉仁義也、則俗謂之君子、其所殉貨財也、則俗謂之小人」（目的が仁義であれば、世間から君子といわれ、目的が貨財にあると、世間から小人といわれる）であるという。こうした古典の典拠関係は、荘子にかなりの理解を持っていた芥川には了解済みのことであったにちがいない。

このような典拠論を踏まえるとき、先に引用した、「大泥坊なんぞはゐなえ方が好い」という「親分」の言葉は意味深いと思われる。前述の読解に従うと、自らが大盗人でありながら、自ら進んで盗賊撲滅か追放派であるかのような発言をしているところに、アイロニーが感じられる。しかし、このような論理が問題となってくるのは、後の文脈で、次のような合理化がなされているからである。

> 同じ悪党とは云ひながら、押込みよりや掻払ひ、火つけよりや巾着切が、まだしも罪は軽いぢや無えか。それなら世間もそのやうに、大盗つ人よりや、小盗つ人に憐みをかけてくれそうなものだ。所が人はさうぢや無え。三下野郎にやむごくつても、金箔つきの悪党にや向うから頭を下げやがる。鼠小僧と云や酒も飲ますが、ただの胡麻の蠅と云や張り倒すのだ。思やおれも盗つ人だったら、小盗つ人にやなりたく無え。（二二八頁）

引用は、第二節において、旅籠屋の奉公人たちの態度の変化から、「親分」が、「大盗人」と「小盗人」の違いについて思いを巡らせている箇所である。ここにおける述懐は、前の文脈とどのように照らし合わせて読むことができるのだろうか。前の論述で分かるように、芥川が『荘子』のテクストを示唆しているとすれば、この箇所は、『荘子』にある「大盗人」と「小盗人」のことを指示していると見える。

『荘子・胠篋(きょきょう)篇』においては、「窃鉤者誅、窃国者為諸侯」[6]という名文がある。意味は、「帯どめを盗むものは殺され、国を盗むものは諸侯になる」となる。それに、この名言は、『荘子』の中で「田成子窃斉」というストーリーを前提にしているものといわれている[7]。

このストーリーの筋を現代に当てはめてみるなら、国家機構やマスメディアを含めた「法」をコントロールする権力を握ると、「盗み」をしたとしても、そうであると見なされないかもしれない、ということになろうか。もちろん、ここでいう盗まれた「国」には、「国有財産」も含まれていると理解されよう。とするなら、寓意としての「盗み」には、「国有財産」を盗んで私腹を肥やしたり、私欲を満たしたりするような賄賂や贈賄や汚職のことなども含まれているだろう。

荘子が、「田成子」のことを「窃国者為諸侯」というように、「親分」も、世間が「大盗人」に「頭を下げやがる」といった、権威を憚った行為を皮肉っているのである。従来の研究において、ここは、テーマ論の展開される大事な箇所でもあるため、本稿も、これを重視しつつ論を進めていきたい。テクストに書き込まれた「親分」の「大盗つ人」「小盗つ人」の議論は、実に日本版の『荘子・胠箧篇』ともいえ、鼠小僧の生きていた時代背景と結び付けて考えるなら、「従来汚職・腐敗の時代の代名詞」[8]である「田沼時代」が、鼠小僧の生きた時代の前にあったことを看過してはならない。

史実によれば、鼠小僧次郎吉は寛政九年―天保三年[9]（一七九七～一八三二）間に生きていたという。彼に関する史料が雑多で、その信憑性も断定できず、物語内容の年代も特定できないので、ストーリーの時代背景は歴史上の記録によって推測するほかはない。先述した「田沼時代」から、鼠小僧が亡くなったとされる天保年間にかけて、江戸時代中後期は、「田沼時代」（一七六七～八六）、「寛政の改革」（一七八七～九三）、「大御所時代」（寛政・天保改革の中間時代）、「天保の改革」（一八四一～四四）といった時期が相次いでいる。その時期の江戸社会は、幕府の中興を目的に行われた改革が推し進められていたにもかかわらず、その一方で、いわゆる腐敗が田沼時代を経て大御所時代へと受け継がれ、政令がたびたび覆されたり、老中たちによる賄賂政治が行われたりした不安定の中を歩みつつあったのである。つまり、賄賂時代と政治改革がかわるがわる繰り返された特徴的な時期であった。一方、下層社会の百姓も「貧しさ」に追われ、社会は常に一揆や打ちこわしや飢饉などによる騒乱が相次いだ。どん底にあった人々は、皆自分なりに時代の貧困や束縛から抜け出そうとしていた。伝承における鼠小僧のストーリーは、そのような歴史を背景に作り上げられたといえよう。

このことは、テクストの登場人物の何気ない発言で裏づけられると考えられる。

「だがの、おれが三年見無え間に、江戸もめつきり変わつたやうだ。」
「いや、変わつたの、変わら無えの、岡場所なんぞその寂れ方と来ちや、まるで嘘のやうでごぜますぜ」
「かうなると、年よりの云ふぐさぢや無えが、やつぱり昔が恋しいの。」
「変わらなえのは私ばかりさ。へへ、何時になつてもひつてんだ」（二一三頁）

引用は、第一節の「親分」と「子分」の会話の一部である。会話の場面となっている「岡場所」の「寂れ方」に関しては、拙稿「『仮面』の深層における構造――芥川龍之介『鼠小僧次郎吉』試論」[10]ですでに論じたように、天保十三年（一八四二）に発布された岡場所撤廃令とかかわっているのであろう。同時に、この岡場所撤廃令は、天保の改革政策の一環とされていたところから、「岡場所」も時代性を示唆する肝心な役割を負わされているとも読みとれる。このような改革にしても、二人の会話からすると、すべてが変わったか、または変わらなかったかに見えるが、実は「変わらなえのは私ばかりさ。へへ、何時にな

つてもひつてんだ」といった「子分」裸松には、依然として貧乏の局面を抜け出そうとするために苦労をしている姿が見てとれよう。そうして、裸松に激変社会のコンテクストが映し出されているため、文脈における彼の存在は、その特徴的な時代を裏付ける有力な証左としてみなしてもよかろう。つまり、腐敗政治であれ、改革時期であれ、下層部に位置する庶民たちは、つねに貧困に付きまとわれたということである。

また、「よしんば風にや吹かれ無えでも、懐の寒むさうな御人体」である「重吉」という「胡麻の蠅」が、入れ子構造の物語の第二節で告白するように、「女房に逃げ」られ、「引き続き不手まはりな事ばかり」多く、「人様に手をかけた」のは「ふとした一時の出来心から」だとすると、彼がいかにどん詰まりに追い込まれたかは想像に難くない。「越後屋の小間物渡世」の「重吉」という人物設定において、「生」の「貧しさ」と「しようがなさ」が生々と描き出されていると見られる。この点で「重吉」は、芥川の「羅生門」の「下人」と共通する。この観点からすれば、「重吉」に対して読者は、彼を見下ろすというだけでなく、小人物としての彼の無力さに同情するように仕向けられている。

以上の論述から、人物の設定上において、また明確な時代性と一致している人格の細部についての描写に対して、ストーリーの時間設定は、はっきりしていない上、長い年代にまたがるとも読み取れることによって、曖昧そのものだとはいえよう。もちろん、それはフィクションの常套手段と捉えても差し支えないが、歴史小説とは異なってそこで用いられる限定されない時間には、何らかの作意が込められているのだろう。前に述べた鼠小僧が生きていた時代の特徴は、ある意味でいえば、作者芥川が生きてきた明治・大正にも当てはまるのではなかろうか。すなわち、同時代性をほのめかすために、類似の歴史的事象がなんらかの形で利用されているといえよう。「何かの都合でしつくりと嵌らないで了つた」作意のためだろうか。この物語の時代をぼかすという仕掛けにより、歴史を貫く背景を利用したリアリスティックな投影が企てられたのではないかと思わせる。

三　歴史における「越後屋」と「現在」の「越後屋」

第三節で、このテクストには、作者がおかれた時代性が現れていると述べたが、ここであらためてその時代性をもとに、大正期の読者にはどのような読みが期待されていたかを問うことにしよう。物語が設定されている江戸時代に大規模な改革がいくつもあり、やがて明治新時代を迎え、そしてデモクラシー思想が盛んな大正時代となる。いずれの時代にも、政権の交替や著しい変革、前代未聞といえるほどのスキャンダルなどが顕著に認められる。この小説にとって注目すべきは、大正期に起こった「賄賂スキャンダル」であろう。特に大正三年に起こったシーメンス事件は、小説執筆当時の読者にとって、最も世を騒がせたものといえる。これは、巡洋戦艦金剛を購入するに当たり、ドイツのヴィッカース社による受注をめぐり、同社・三井物産・海軍高官の間で起こった贈収賄事件であり、金剛事件、または三井物産事件ともいわれる。この事件の影響によって、山本権兵衛第一次内

閣は総辞職を余儀なくされた。一九一五年（大正四）に出版された辻善之助『歴史講座・田沼時代』の緒言には、それに対する言及が見られる。

> 大正三年の春、山本内閣の末路に際して世間で攻撃が盛んであった時にある新聞に某貴族議員の談話として記してあったことに、その人の子供が小学校の日本歴史を読んでいるのを聞いておって、何心なく耳を留めると、その記事は「十代将軍家治の時に至り、執政の臣その人を得ず、賄賂公けに行われて政治正しからず、人民大に窘しめり。しかのみならず暴風洪水などの天災荐に至り、飢饉もまた相次ぎしかば、貧民諸所に騒擾し、遂に江戸の市中にも暴民の蜂起を見るに至れり」云々。これを聞いておった貴族院議員は、如何にもその記事が現代の様子をそのまま現しているように見えたので歴史は繰返すという事をいうが如何にも尤もだと非常に興味を引いたという事が書いてあったのである。（後略）

以上の記述から、シーメンス事件と関係した賄賂のあり方を田沼時代のそれになぞらえるのは、当時の社会にとって共通した認識であったといえよう。ちなみに、「十代将軍家治の時」こそが「田沼時代」のことである。

まず、シーメンス事件に深くかかわった、三井物産に注目しておこう。三井物産は当時もよく知られていたことだが、三井財閥の中心的存在だった。そして、その三井財閥は、江戸時代に呉服業を扱った越後屋を起源とする。では、テクストに登場する「越後屋小間物渡世」の「重吉」は、歴史上の越後屋と関わりのある者なのだろうか。もちろん、即座にそう決め付けるわけにはいかない。同じ屋号であっても、必ずしも呉服業を扱うわけではない。が、調べてみると、江戸期に競い合った呉服業の中、「結局はこの四大呉服店のうち更に隆盛を続け得たのは越後屋三井だけ」であり、「この越後屋が親戚の富山や伊豆蔵のあとを追って、［日本橋］に小間物店を開いたのは延宝元年のことであった」[11]という。従って、鼠小僧の生きた時代になると、越後屋の小間物業が重吉の勤め先の「深川の六間堀」にも及んでいたろうことは推測できる。それに、テクストでの「越後屋重吉」という呼称は六回もあり、この反復に作者の意図があろう。群衆心理学でいう、言語の反復による感染作用[12]を受け、読み手は、心理的暗示を受け、一種の権威的な認識が確立する。「越後屋」という語は、ただの屋号だけではなく、同時代の「三井」へと連想できる架け橋の役割を負わされているのである。

さらに、テクストの第二節における、「親分」が「盆茣蓙の上の達て引きから、江戸を売」って、「甲州街道」への道を踏みはじめたときの風景描写にも注目すべきである。奥野久美子は、「芥川龍之介『鼠小僧次郎吉』—講談本との関わりについて—」[13]において、芥川「鼠小僧次郎吉」には、博文館から大正七年七月に出版された三代目小金井蘆洲講演、加藤由太郎編『鼠小僧次郎吉』がかかわっているとしている。奥野論文は七つの比較項目を設定し、講談本十四版本を取り上げている。が、典拠とされる講談本では、ストーリーは甲州

街道だけでなく、様々な場所で展開しているのに対し、芥川の場合「甲州街道」にある「八王子」だけがストーリーに取り込まれているのである。これは、なぜだろうか。

奥野論文は、細緻な比較検討をしているにもかかわらず、テクスト第二節における風景描写についての言及はしていない。本稿は、その一見して文脈と関係なさそうにみえる細かい描写に、なんらかの深い意図が込められたと見る。というのは、このあたりの箇所は講談を典拠としたのではなく、芥川自身が作意的に作り出したと考えられるからである。以下の引用を見てみよう。

> まして甲州街道は、何処の山だか知ら無えが、一面の雲のかかつたやつが、枯つ葉一つがさつか無え桑畑の上に屏風を立てよ、その桑の枝を摑んだ鶸も、寒さに咽喉を痛めたのか、声も立て無えやうな凍て方だ。(後略)(二一六頁)

ここの描写を読むと、なぜ「桑畑」と「桑の枝」についての言及があるだろうかという疑問が湧く。この講談本にも見られない言葉が、どうして作者の中に生じたのだろうか。

「桑」は、「絹」のもとをなす「蚕」の餌である。明らかに「桑」は、呉服と関連している。かつて「『桑の都』と呼ばれた「八王子」は、「江戸初期に甲州街道が開発され、早くから宿駅として指定」[14]されていた。しかも、「江戸とも近いという有利な地域性の故に、八王子は山地の産物である生糸・織物の取引中心地」[15]として栄えていた。「甲州街道」の「八王子」は物語展開の主な地点であり、そこが「桑の都」と呼ばれたのは、江戸時代の生糸・織物の集散地でもあったからである。したがって、「越後屋重吉」が「甲州街道」に現れたのは偶然ではない。実際、重吉が「小間物渡世で年にきつと一二度はこの街道を上下」するというように、呉服業とかかわった生糸・織物の集散地に出かけて行くのは当然のことである。それは、後に「親分」が彼に連れられていった旅籠屋「山甚」が「私の定宿」だということからも裏付けられる。「親分」が「桑の都」に通ずる街道を遁走する以上、目につくものは「桑の木」だろう。

実は、ここでの描写は、芥川の実体験に基づいたものかもしれない。『芥川龍之介未定稿集』[16]の編者の葛巻義敏が芥川の日記を調べて推定したところによれば、明治四十一年八月、芥川一行は、浅川を出発し高尾山、小仏トンネル、上野原を経て、桂川に沿って甲府まで辿りつき、また日野春を過ぎ、八ヶ岳を見て回ったという。日記の中には、沿線の風景が次々と記され、八ヶ岳のあたりにくると、「高原がつきると、桑の畑になる。桑〔畑〕の末に　諏訪湖の青白く　震えるのが見〔え〕る頃は、もう夕方であった」[17]とある。彼らが旅立った道筋は、ちょうど昔の甲州街道と重なっている。その上、高尾山は八王子にある山、上野原は甲州街道の宿駅で甲斐絹の産地として知られていた。

また、伝承を受け継いだ創作であっても、作者の中で無選別に行われたわけではなかろう。この点について、佐藤美加[18]は言葉遣いを、奥野久美子は小道具などを取り上げて詳しく論じている。ただし、ここで付け加えたいのは、その無選別ではない作業といえば、

どのような基準あるいは理由によって取捨選択されたのだろうかということである。前の論述と結びつけてみると、それは「越後屋」を指し示そうとする意図によるものにほかなかろう。

さらに探ってみると、芥川「鼠小僧次郎吉」は単行本『夜来の花』において全ルビだったのである。その中で、「親分」が持っていた煙管の名前の「如心型」には「によしんがた」とのルビが振られている。が、しかし、先述した奥野論文が論及している三代目小金井蘆洲講演、加藤由太郎編『鼠小僧次郎吉』を調べると、第二席の件に、「右の手には銀と赤銅と四分の一の張交になつて居る有平の如心型の煙管を握つて居る」という文がある。実は「如心型」の正確な読み方が明らかにされているのだ。ところが、芥川が最も参考にしたと思われる典拠が「じよしんがた」としているのに、なぜ単行本のルビ付けが違っているのだろうか。筑摩版の『芥川龍之介全集』よると、それについては「茶道の表千家如心斎の好みのキセルの形」というように説明されている。実はここにある茶道の表千家如心斎とは、茶道千家の本家で、その七代目の家元の天然宗左の号である。資料[19]によれば、如心斎の時代から表千家は当時の豪商の三井などと緊密な関係を持っていたということである。特に、近代の茶家発展史において豪商との関連で特筆すべきことであるが、明治時代になると、「茶道は旧時代の遺物として全く顧みられなくなり、紀州藩の手厚い庇護もなくなり、茶道・家元制度ともに存亡の危機に立たされ」た。この時、「家元制度をとらずに特定の藩組織の中でのみ普及していた流派は消滅した。表千家も危機的状況にあったものの、家元制度をとっていたこと、そしてなにより三井家という強力なパトロンを擁していたことにより、裏千家のような辛酸は舐めずにすん」[20]だということだ。まさにそのルビ付けの過ちは、明治を生きてきた芥川ら知識人にこのような因縁を忘却させないかのように役に立っているのだろう。

こうして「越後屋」と「如心型」を結ぶなら、自然と「三井家」が連想されるようになっている。では、こうして、作者芥川が、テクストの仕掛けとして「三井家」の存在を示唆しようとしたのは、何のためだったろうか。それは、前節で示したように、三井家の三井物産の介入によるシーメンス事件への暗示があったと考えてよいのだろう。史料によると、この事件で事情聴取を受けた海軍高官は「灰色」として処理され[21]、三井関連の重役たちもほとんどが執行猶予で釈放されたという。それに対し、この事件の告発役を務めた元海軍大佐太田三次郎は免官された。新聞には、事件の真相と海軍の「廓清」を図るため、彼の発言が載せられた。

（前略）而して藤井、澤崎の収禁に就ては「彼等は雑魚の魚交じりで、海軍の巨頭連の醜事実に比ぶればホンの微罪である、呑舟の魚は外にある、これを捕へなければ海軍廓清の實は擧がらぬ、併し恐らく海軍当局者は彼等両人を収禁したのを鬼の首でも取つたやうに世間に吹聴し事件の擴大を防止するであろう」云々（後略）。[22]

ここで報じられた内容は、芥川「鼠小僧次郎吉」にある「大盗つ人」「小盗つ人」のイメージと相通じるものがある。ちなみに、この事件で総辞職した山本権兵衛は後に、再び組閣し、齊藤実も第三十代総理大臣となり、岩原謙三は東京放送局の初代理事長・会長に就任し、山本条太郎は政友会幹事長・満鉄総裁を歴任し、国の運命を左右できる「諸侯」となっていた。

四　関連する言説の検討

芥川「鼠小僧次郎吉」には、上述のようにシーメンス事件への示唆だけでなく、社会民衆の一員としての下層社会の人々への関心が見られる。そのため、「重吉」の設定には、さらに別次元の意味が浮上してくる。このように、登場人物にあった小さな出来事を執筆時代のコンテクストと対照して読む価値があると思われる芥川作品は、実は少なくない。「鼠小僧次郎吉」の執筆前後の作品としては、主に「蜜柑」(『新潮』一九一九年五月）と「舞踏会」(『新潮』一九二〇年一月）それに「魔術」(『赤い鳥』一九二〇年一月）の三篇が留意されるべきである。

シーメンス事件への言及を、これらの作品から読み取るならばこうなる。「蜜柑」では、「私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切つてゐた。講和問題、新婦新郎、涜職事件、死亡広告」という言い方がなされている。後の二篇では、「三井」に対して、一介の冷笑傍観者の嘲笑も感じられる。「舞踏会」に出た「天長節」の日に、舞踏会の「主人役」を務めた「伯爵」には、モデルがあるといわれていて、それは当時の外務卿である井上馨とされている。この人物は、もっとも三井と密接に結びついており、明治時代から三井財閥の最高顧問を務めたが、大正期に入って三井の番頭を兼ね南満鉄の総裁となった早川千吉郎とは「親分」「子分」の関係にあったとうわさされていた[23]。三井財閥への批判という観点からすれば、それは「鼠小僧次郎吉」とほぼ同時期の作品として、芥川の中に漲る社会への憂慮も読み取れよう。そのような憂いは、「魔術」では一種の風刺に変わり、それが行間から透けて見えてくる。そこには、「これぢや一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けないやうな金満家になつてしまふだろう」と考えていた「私」がいる。「私」にとっての揶揄の対象は、「三井」にとどまらず、それら財閥組織のピラミッドの頂点に立ち、政治勢力と結託し、自ら政党制の有力なスポンサー[24]として国家を翻弄しうる、いわゆる当時の「富豪」[25]たちでもあるといえよう。

このようなさりげない社会批判は、一九二二年四月十三日、神田青年会館で行われた「英国皇太子来朝記念英文学講演会」で行われた「ロビン・ホッド」という演題での講演にもみられる。そこで、芥川は、鼠小僧及び日本史上の大泥棒を取り上げるとともに、「人が取られて居る場合は、殊に非常な金持、岩崎とか三井とかが金城鉄壁の如く塀を取廻して威張つて居る所へ忍び込んで金を取つたと言へばそれは壮快でせう」[26]という財閥への不満を込めた皮肉の言葉を述べている。それは、民衆の心の声を代弁しているかのように思わ

れる。

また、シーメンス事件との関連が想定されるルポルタージュとして、大正六年夏の『時事新報』に連載された「軍艦金剛航海記」（以下は「航海記」と略す）がある。面白いことに、三年前のシーメンス事件は、当時の『時事新報』に報道されることではじめて世間に暴露されたという因縁をもっていた。「航海記」は、従来、芥川文学の中で記録文[27]のように考えられてきたが、実は見聞をありのままに記録する以上の何かを語ろうとしている思える描写もあちこちに見えている。たとえば、「山本大尉」という軍人が登場するが、彼については「その人はシイメンのタイプに属さない、甚だ感じの好い顔をしてゐた。何でも国防計画か何かを論じてゐるらしい」とされている。彼は、「憂国家」として、金剛の艦上で「二十年以前の日本と今日の日本とは非常な相違です」と語るが、「僕」には「二十年以前の日本と今日の日本と、何がどうちがふんだか、実は少しも分からな」かった。海軍軍艦で触れた国防計画は、いうまでもなくシーメンス事件後の一連の軍備政策と世界大戦をめぐる発言である。したがって、「僕」の思いには、「歴史の繰り返し」を裏付けたかのように、江戸の老中政治に類似して政治や軍事上の醜聞が再発したことへの仄かな暗示が包含されているといえる。「航海記」は単なるルポルタージュでなく、かつて、芥川自身が、海軍兵学校の教師として経験したことを盛り込みながら、それをこえた一つの虚構として創作されたものともいえよう。

さらに、この「航海記」の「四」では、炭庫の見学が記されている。「僕」は「此中で働いてゐる機関兵の事を考へると殆ど僕と同じ肉体を持つてゐる人間だと思はれない」と率直な感想を漏らすとともに、また「僕のやうな労働に縁の遠いものは、五分とそこにゐると、神経にこたへてしまふ」とも書いている。見学者「僕」にとっては、残酷な環境で働かなければならない軍隊の位階制の最も下にいる兵士たちへの同情は、「鼠小僧」での「重吉」のような小人物への同情、または関心に通じている。また、「軍艦の臭ひ」が描写されている「二」にも、奥深い表現が認められる。

> 中にはその中で、うす暗い電燈の光をたよりに、本を読んでゐるものも二三人あつた。僕たちは皆な背をかがめてそのハムモツクの下を這ふやうにして歩いていた。その時僕は痛切に「軍艦の臭ひ」を嗅いだ。これはペンキの臭ひでもなければ、炊事場の流しの臭ひでもない。さうかと云つて又機械の油の臭ひでもなければ、人間の汗の臭ひでもない。恐らくそれらのすべてが混合した、――要するにまあ「軍艦の臭ひ」である、これは決して高等な臭ひではない。こんな事を考えながらふと頭をあげると、一人の水兵の読んでゐる本の表紙が、突然僕の鼻の先へ出た。それには、「天地有情」と云ふ字が書いてある。――僕は一瞬の間、「軍艦の臭ひ」を忘れた。さうして妙に小説めいた心持になつた。[28]

うす暗い軍艦の内部における「高等な臭ひ」ではない臭いは、卑俗で見下されるべきく

さい世間を暗示している。そして、軍艦に見られる混沌とした現実とその世界によって生まれた混乱に厭きた瞬間、「僕」はロマンに遭遇し、「暗鬱な現実」から逃れられたのだ。その「暗鬱な現実」はまた、「蜜柑」での「憂鬱」に通じていると見てよい。この「金剛」と名づけられた軍艦をめぐるテクストは、海軍兵学校の教師としての芥川に伝えられた、時事的な情報に基づくものだろう。背後に国の近代化の使命を背負わされた軍艦にいる「僕」は、陸地が見えたとたんに、「妙に気が軽くな」り、別に「僅か何日間の海上生活が、退屈だったと云ふのではない」が、「陸に近いと云ふことはなんとなく愉快で」あるといった感想を漏らすことになる。それは、単なる身体的な解放感だけでなく、濃厚な歴史の陰影からの精神的な解放感とも読むべきであろう。無論そこには、作者芥川が当時、海軍兵学校の教師の立場にあった以上、帝国の誇りである軍艦を称えるべき文章を書くことが暗に期待されており、露骨に嫌悪感を表に出すことはできなかったという屈折も示されている。ちなみに、芥川は大正五年十二月から八年三月まで横須賀にあった海軍機関学校で教鞭をとった。

以上のような芥川のスタンスは、さらに遡れば、一九〇九年から一九一一年頃の執筆と考えられている初期の文章「日光小品」にも表われている。この小品は「芥川文学の原点」に位置づけられ、「現実を生きるものから現実を見るものへ、この転回によって芥川における芸術の道はきりひらかれた」とも高く評価され、また「対社会、対人間についての多層なスタンスが覗かれる」作品などとも評されている[29]。その中に「工場（以下足尾所見）」という節があるが、文章は「黄色い硫化水素の煙が霧の様にもやもやしてゐる」という暗い基調で始まっている。この書き出しは、先行論を待つまでもなく、足尾鉱毒事件にかかわっていることがはっきりしている。この事件は、十九世紀から二十世紀にかけておこった日本史上初の公害事件として知られるが、足尾鉱山は古河鉱業の所有であり、明治維新後、産業の近代化につれて採掘が推進され、その結果、精錬排煙で排出された鉱毒ガスによる環境の被害が発生したという。

こうした背景を持つ足尾を旅した芥川は、文章の最後の節の「温かき心」で二ヶ所ほど「古河橋」に言及している。この「古河橋」というのは、ドイツ人の設計により明治二十三年に完成し、名称は足尾銅山近代化の立役者である古河市兵衛に由来するといい、日本でも最も古いものに数えられる道路用鉄橋といわれている。この橋は日本鉱山業の近代化のシンボルともいえる。ところが、まさにここに立った芥川は、最新の技術を導入し、足尾でいち早く文明の光に浴させた古河財閥の元取締に感謝の意を表するどころか、深刻な問題をもたらしてきた近代化の政策をあえて難詰する姿勢をその文章の論調に込めているように読み取れる。

難詰のきっかけとなったのは、「工場」の節の冒頭で、精錬排煙の光景を描写しているところにある。また、この節の末尾部分で作者はこのように描いている。

労働者の真生活と云ふやうな悲壮な思が抑へ難い迄に起こつてくる。彼等の銅のやう

な筋肉を見給へ。彼等の勇ましい歌をきゝ給へ。私たちの生活は彼等を思ふ度にイラシヨナルな様な気がしてくる。或は真に空虚な生活なのかもしれない。[30]

この文章に見られる作者芥川のスタンスは明瞭である。「労働者の真生活」に対すると呼応しているのである。小品の最後の節「温かき心」で芥川は、そこでも自然主義者の主張を批判し、「私たちは飽く迄態度をヒユーマナイズして人生を見なければならぬ」とし、また「「形ばかりの世界」を破つて其中の真を捕まへようする時にも必ず私たちは温かき心を以てしなければならない」と説いている。こうして芥川は、「温かき心」を重視し、「文芸の上ばかりでなく温かき心を以てすべてを見るのはやがて人格の上の試練であらう。世なれた人の態度は正しく是だ。私は世なれた人のやさしさを慕ふ」と述べることで、このことを単に作者一個人の課題とするだけではなく、広く人間の「人格」へと拡大・深化させることを願っている。作者芥川の、形ばかりでない「真」を探求する姿が文章には躍如としている。

労働者の「真」なる生活を前に、鋭敏な作家はそれを「イラシヨナル」と見抜き、一種の不合理感をとらえていたのである。そして、文芸のみならず、生活のすべての面で「真」なることを、「温かき心」で満たすべきだと訴える。作者芥川にとってそれは、政治、経済、外交、教育などもその「すべて」に包含されているだろう。ここに読まれる「ヒユーマナイズ」するという態度は一種の理念として、当時社会を統合する財閥制度や政党闘争や軍事競争などへの冷眼傍観的な批判と同時に、社会の下層に位置する労働者や小人物に対しての、憐憫であれ、同情であれ、憂愁であれ、それらの「心持」が種々雑多なテクストに化し、芥川文学に一貫して認められる。それは、近代日本を生きる理知のある知識人の「つとめ」[31]意識が強く働いたからであろう。

五　終わりに

本稿は、実証的な角度から、芥川「鼠小僧次郎吉」における伝承との一連の差異から、参照するべき典拠と芥川自身の経験との間の関連を検討した。この作業を通じて、フィクションとノンフィクションの要素がこのテクストにおいて混ぜ合わされ、現実的な次元の意味を賦与されていたことがわかった。そのうえ、テクストの人物の設定の工夫によって、従来の落語風の純然たる笑話から脱して、苦笑いしかできない小人物の「しようがない」姿を描く複雑微妙なストーリーが作り出されていることが分かった。実に、本テクストにおけるさまざまな「苦心」は、芥川の実見談の一環であると同時に、作者生活としての「しょうがなさ」の一つの反映とも考えられる。

また、本テクストにみられる「桑」、「如心型」、「親分」「子分」、「八王子」「甲州街道」等々比喩的な意味を持った言葉遣いは、ほかの作品にも別の形で混入していて、それぞれ相互参照できるかのように設置されていることがわかった。それらが芋蔓式に絡まってい

て、必ずあるモチーフに集結しているのである。本稿では、「鼠小僧次郎吉」をはじめ、「日光小品」、「軍艦航海記」、「蜜柑」、「舞踏会」、「魔術」などのテクストとその内部に沈潜したつながりを発掘することを通して、芥川が一貫して貫いてきたモチーフを看取した。無論、それらの作品は全く別々の時代背景をもった完全に異なる物語ではあるものの、激動する時代背景の下で「新」と「旧」の秩序の狭間に身を置き、「善」と「悪」のどちらもまっとうに判断できずに「個人」としてどのような姿勢を抱くべきか、あるいは何をすべきかに迷った知識人芥川の姿を浮かび上がらせる。その姿はテクストの暗部に潜んでいて一見したところでは目立たず、暗示的にしか現れていない。しかし「鼠小僧次郎吉」とそれと同時期に書かれた短編群とを絡み合ったものとして読み解くことによって、その隠された姿が浮き彫りとなり、そこから新しい意味を見いだすことが可能であることを本論文では明らかにした。

注

1 「初春の文壇（十一）」『読売新聞』七面、一九二〇年一月十六日。

2 若松美智子『劇作家シングのアイルランド――悲劇的美の世界――』彩流社、二〇〇三年。傍線は筆者による。以下同様。

3 奥野久美子「芥川龍之介「鼠小僧次郎吉」―講談本との関わりについて―」『日本近代文学』第七十三集、二〇〇五年十月。

4 『新編古典文学全集・四十四』小学館、一九九五年、一五七頁。

5 同書、同頁。

6 『新釈漢文大系第八巻・荘子（下）』明治書院、一九六七年、三三三頁。

7 『新編古典文学全集・四十四』（小学館、一九九五年）を参照のこと。

8 尾河直太郎『江戸民衆史・下』文理閣」、一九八三年、九十四頁。

9 大隈和雄ほか編『日本架空・伝承人名事典』（平凡社、一九八六年）による。

10 『文学研究論集』第25号、筑波大学比較・理論文学会、二〇〇七年。

11 白石孝『日本橋街並み繁昌史』慶応義塾大学出版会、二〇〇三年、一二三頁。

12 ギュスターヴ・ル・ボン『群衆心理』（大日本文明協会編、一九一〇年）を参照のこと。

13 『日本近代文学』第七十三集、二〇〇五年十月。

14 正田健一郎編『八王子織物史・上』八王子工業組合、一九七二年、五〇〇―五〇二頁。

15 同書。

16 岩波書店、一九六八。

17 葛巻義敏「槍ヶ岳紀行」『芥川龍之介未定稿集』岩波書店、一九六八、二三四頁。

18 「芥川龍之介の『鼠小僧次郎吉』の表現――式亭三馬との比較――」『岡大国文論稿』、一九八七年三月。

19 谷端昭夫編『茶道の歴史・茶道学体系』（淡交社、一九九九年）を参照のこと。

20　井口海仙ほか編『日本の茶家』河原書店、一九八三年。

21　奈倉文二・横井勝彦・小野塚知二『日英兵器産業とジーメンス事件 ： 武器移転の国際経済史』日本経済評論社、二〇〇三年。

22　「光明と暗黒」『東京日日新聞』一面、一九一四年二月十八日。中にある「藤井」は元艦政本部第4部長で海軍機関少将であり、「澤崎」は海軍大佐である。

23　『現代富豪論』（山路愛山、中央書院、一九一四年）九頁及び、『三井―日本における経済と政治の三百年―』（ジョン・ロバート著、安藤良雄＋三井礼子監訳、ダイヤモンド社、一九七六年）を参照のこと。

24　前掲書の『三井―日本における経済と政治の三百年―』一二一頁に「三井は政友会のなによりの資金源になったと考えられる。三谷との紛争が落着した二か月後に結成された政友会は、やがて薩摩―土佐―三菱のライバルを圧倒する長州―三井枢軸を形成したのであった」とある。

25　この言葉は、山路愛山前掲書から借用される。この著作に「三菱」と「三井」については章別で論じられている。また、『芥川龍之介全集』によると、芥川は嘗て山路愛山にも言及しているのである。

26　『芥川龍之介全集』第九巻、一二九頁。

27　『芥川龍之介全作品事典』（関口安義ら編勉誠出版、二〇〇〇年）の「軍艦金剛航海記」項を参照のこと。

28　『芥川龍之介全集』第二巻、二一五頁。

29　同書「日光小品」項を参考のこと。

30　『芥川龍之介全集』二十一巻、一三六頁。

31　「日光小品」の「温き心」で、「さうだ温き心以ってするのは私たちの務めだ」とある。